

世界の家・街並み

高岡 Takaoka

富山 TOYAMA JAPAN

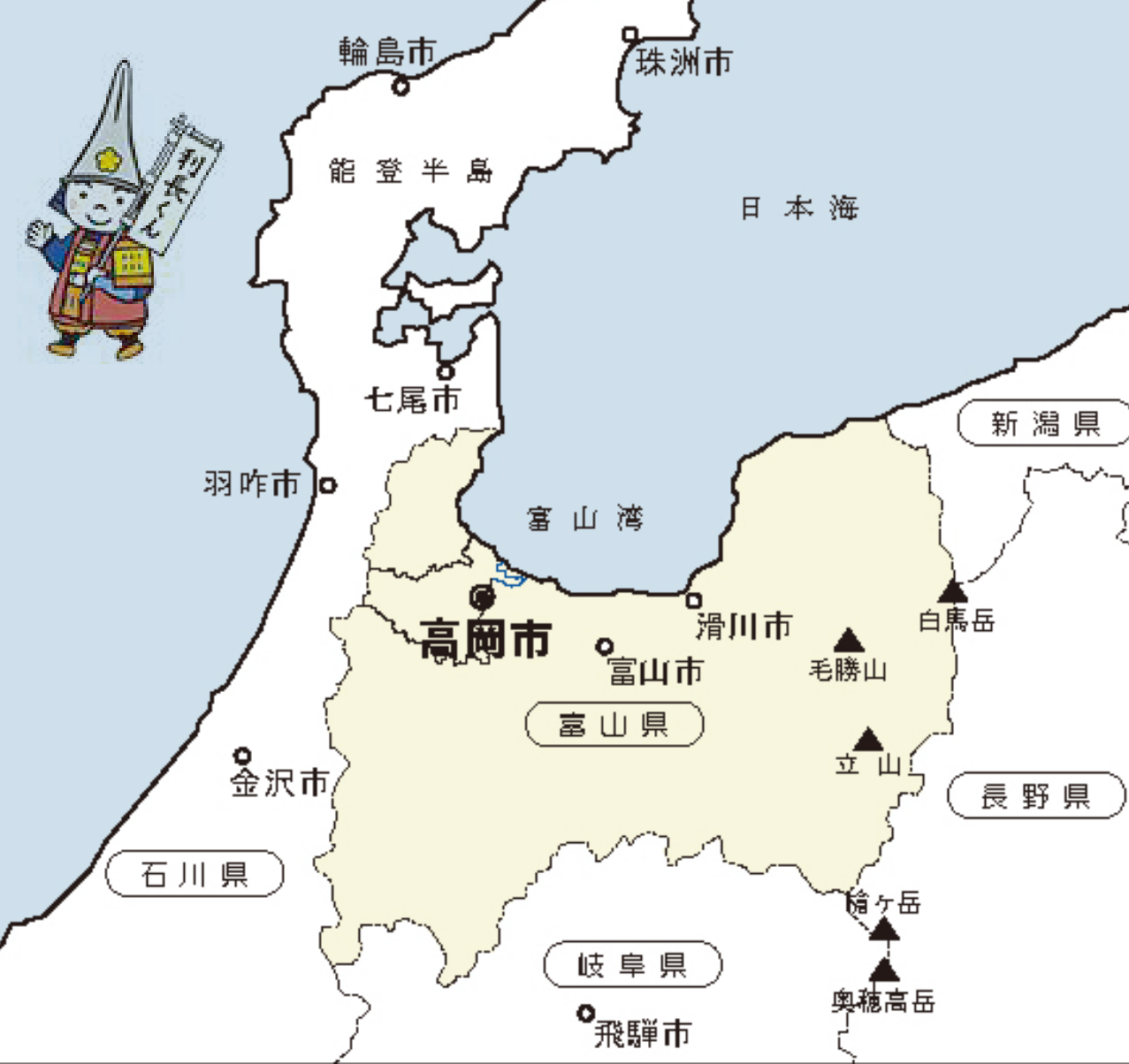


歴史都市高岡は富山県の北西部に位置し、富山市に次ぐ県下第二の都市である。加賀前田家二代の前田利長が慶長14年(1609年)に高岡城と城下町を築いたのがその始まりで、高岡城は築城後わずか6年のうち一國一城令によって廃止になった。短い期間とはいえ城下町であった高岡は、いまでは古城公園になっている城跡があり、町割りの骨格に城下町の痕跡を残している。伝統的な町並みは現代の混乱する都市景観のなかにあって、快い統一感をもってわれわれの前にあらわれる。これらの町並みを形成する建物がいつ建てられたのかわからない。レンガ造のもの、外壁をタイル張りにしたものなど、近代建築であることが一見してわかるものもあるが、江戸時代以来の伝統的な材料、デザインを受け継いでいるものは年代がすぐにはわかりにくい。調べてみると江戸時代のものは以外に少なく、伝統的な様式の建物も近代になって建て替えられたものが多い。つまり、これらの町並みを形成する建物は最初のものがそのまま残っているのではなく、現在みることができる建物は二代、三代目、さらにそれ以降の建築である。歴史を重ねた建物や町並みによって、かつての商都高岡の繁栄ぶりを十分にみせてくれる。Takaoka city is a historical city located in the north west region of Toyama prefecture. And it is the second biggest city after Toyama city. Takaoka city was originally built by Toshinaga Maeda, the second lord of Kaga, who built Takaoka castle and a town around it in 1609. However because of Ikoku-ichijo(一國一城, literally, "One Castle Per Province") order, the castle was abandoned only after 6 years. Now the ruin of the castle is used as a park and one can know that Takaoka city was once a castle town because of the way its urban plans have been made. Unlike the modern urban cities which tend to have a chaotic city landscape, historical Takaoka city has a comforting unity. And there is an interesting fact behind this landscape. Aside from brick houses and tiled houses, which we could easily tell were built after Edo era, it is hard to say when all the houses built with traditional materials and design were actually built. Although they have traditional styles, they were, in fact, built in modern days. This means that many of the houses and buildings which have been rebuilt for a few times have kept their traditional design till this day. Through these historical buildings, we could see the prosperity the city enjoyed in old days.



大野博和
(Hirokazu Oono)

出典：高岡市歴史文化基本構想



富山銀行



井波屋伊壇店



山町筋

山町筋は、黒漆喰塗り観音開きの土戸をもつ土蔵造で規模が大きい町家と洋風建築によって特徴づけられる。この町筋は明治三三年(1900年)に大火にあい大きな被害を受けたが、そのなかにあつて以前から土蔵造の建物が焼けのこり、それが評価されて土蔵造が多く建てられた。明治後半という時代を反映し、また、行政指導もあって、建物の両側面をレンガの耐火壁にしたものもあり、小屋組を洋小屋(トラス)にしたものも少なくない。建築外観のディテールにみるべきところが多い。

金屋町は、比較的狭い道路の両側に屋根勾配がゆるく、前面に板葺きの庇をつけた、軒が深い家々が連なる。いまは瓦葺きが多いがもとは板葺き石置き屋根であった。山町筋が土蔵造りであるのに対して、こちらは木をあらわしている。火災に対する配慮は、主屋の背後の中庭をへだてて土蔵を配している点である。座敷まわりの銘木や土蔵に用いられている金物など建築内部のディテールにみるべきものがある。



金屋町

吉久は、いわば農村地帯にある町並みで寺社もあり、一つのまとまりを持っている。道路に沿う間口が狭く奥行きが深い敷地や道路にそって軒を連ねる主屋も町家の形態をとっている。しかし、土間は、表から裏まで続く通り庭形式でなく、入口のところだけに留まっていて、町家に多くみられる形式とは異なっている。この点は農村に立地していることに関係あるのだろうか。建物は江戸末期から昭和初期のものが伝統的様式によっている。大正・昭和の比較的新しいものが多い。



左図：利長くんは、2009年9月13日に開町400年を迎えた富山県高岡市の開町400周年記念マスコットキャラクター。モデルは高岡城を築いた加賀藩2代目藩主の前田利長。



岩城家



菅野家



吉久